交流実験 2023・春「動詞的教養教育 2023」参加報告
2023.3.25-3.27

弘前大学：佐々木夏凛/渡邉拓海/齋藤結友/柴田香花/(鎌田翔至) 近畿大学：井関葵

「動詞的教養教育」は、科研 基盤研究(C)_課題番号 20K03090 「«地域への目覚め»を介した日本型複言語・複文化教育モデルと複文化教育交流実験検証」（代表：弘前大学_熊野真規子）の分担研究者_高橋梓（近畿大学）による、新しい教養教育の手法研究である。

2022 年度末、大阪で対面実施が叶った「動詞的教養教育 2023」(2023.3.25-26)に遠隔地から参加した学生の参加アンケートを編集し、次ページ以降に添付する。

弘前大学×近畿大学 動詞的教養教育 2023
@近畿大学_大阪
2023.3.25-27 参加報告書

弘前大学人文社会科学部　佐々木夏凛

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）14:00-15:00
アカデミックシアター見学会

感想
関西圏に来て、周りは関西弁を話す人ばかりなので、自分が外国人になったようなマイノリティになったような感覚になりました。寂しさとかはないが、少し不思議な感覚になった。

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）15:30-17:00
ワークショップ「規範的文化要素を脱するために」

1) プログラムの中で気がついたこと
自分の中の複文化を表現することの難しさ。自分の中に複文化や複言語が無意識のうちに存在していることはなんとなく認識していたが、それを人との会話の中で表現したり伝えることは難しいと感じた。
2) 学びを活かすには
自分の中の言葉を増やす。自分の中の感じていることを表すのに十分な言葉ないと感じたため。

・日時：2023 年 3 月 26 日（日）10:30-14:30
フィールドワーク_大阪上本町探求調査

1) 事前学習を通しての目標
筋と通りを意識して歩くこと。昔の地形や範囲外にあるが重要な意味を持つ山の方角などを意識する。
2) プログラムの中で気がついたこと
意識していても、具体的な例を知識として事前に持っていなければ、抽象的な概念に繋がる具体を街中から探し出すのは難しいということに気がついた。自分の興味がストーリーを想像させる言葉や名残にあるのではということに気がついた。地名から過去の街の様子やそこでの様子を想像することが思ったより楽しかった。
3) 学びを活かすには
フィールドワークを通して見つかった疑問の解決。次回歩く中之島地域の具体的な知識を多少入れておいて、学びが深まると感じるか試してみる。

・日時：2023 年 3 月 27 日（月）

学生間交流

1）27 日に初めて「体験したこと」

あべのハルカスに登って、大阪の街を上から見た。

2）体験を通して「気づいたこと」

道の形や、生駒山を始めとした山、古墳など昨日のフィールドワークでは見えなかった、大阪の街を見ることができた。

弘前大学×近畿大学 動詞的教養教育 2023
@近畿大学_大阪
2023.3.25-27 参加報告書

弘前大学人文社会科学部　渡辺拓海

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）14:00-15:00

アカデミックシアター見学会

感想

単なる図書館ではなく、明確な意図を持って内装が作られているのが面白かった。知識の入り口としての役割をこなすための図書館であるため、普通では見られないような展示がたくさんあるのが面白かった。

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）15:30-17:00

ワークショップ「規範的文化要素を脱するために」

1) プログラムの中で気がついたこと

文化という規範がいかに日常に侵食しているか、自分自身の無意識を支配しているかということが理解できた。複言語・複文化という考え方に対して、すべての文化を混合したひとつの文化を作るのではなく、それぞれの文化が独立したまま自分の中にあるという在り方は、ある種の理想的な考え方であると思った。

2) 学びを活かすには

ここで学んだ内容を常に意識しながら、さまざまなもの、特に日常を見続ける必要があると思った。個々人の文化というものに着目し見ることで、複文化主義の在り方について望ましい姿が見えてくると思う。

・日時：2023 年 3 月 26 日（日）10:30-14:30

フィールドワーク_大阪上本町探求調査

1) 事前学習を通しての目標

上本町について自分の興味を掘り下げる方向で学習することを目標とした。特に、寺社仏閣が民衆にどのように受容されているかということについて理解を深めることを目標とした。

2) プログラムの中で気がついたこと

上本町には寺が思った以上に多かったことと、鳥居を持つ寺が多くあったこと。また、宗教が町に馴染んでいる様子を感じ取れた。四天王寺に入るとき、自然にお辞儀する老人の方を見て、なんとなく地元の人だと思ったが、あれがこの町における宗教であると思った。

3) 学びを活かすには

寺社仏閣について、地域のほうから理解を深めることができた。また、以前学んだ久渡寺のように鳥居を持つ寺が多くあったことから、神仏習合と民衆、地域の関係性について考察する材料ができたため、この方面から深めていきたい。

・日時：2023 年 3 月 27 日（月）

学生間交流

1) 27 日に初めて「体験したこと」

大阪・心斎橋にあるアメリカ村にて多数の古着屋を巡り、商品を購入したこと。

2) 体験を通して「気づいたこと」

アメリカ村で古着屋を訪れたとき、店員との会話で古着を通して共通の価値観を共有し会話をしていた一方で、青森から来たことを明かすと途端に会話が観光客向けに変わった。その変化が非常にスムーズに進んだことが面白く感じた。今回の交流実験を通して理解した、文化というものの複雑な諸相が、店員対客という関係の中にもあるのだと気づいた。

3) その他

近畿大学の学生との交流を通して、当然ながら近畿大学にも外から来た人がいるということがわかった。いわばネイティブの大阪人だけではなく、他の地域の出身者も当然のように混ざっているということに、いざ直面するまで気づいていなかった。今日一日、近大生と行動を共にしていたが、彼は同じ札幌出身でありながらも大阪の文化をすでに内在化しており、異なる二つの文化を使い分けていた。

弘前大学×近畿大学 動詞的教養教育 2023
@近畿大学_大阪
2023.3.25-27 参加報告書

弘前大学人文社会科学部　柴田香花

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）14:00-15:00

アカデミックシアター見学会

感想

大学の図書館というと、自分が求めている情報を探す場所であると思っていたが、アカデミックシアターは、知識の入り口となるように並べられている、という部分に魅力を感じた。私は、新しいジャンルの本を開拓するのがあまり得意ではなく、いつも同じジャンルを選んでしまうし、少し興味が湧いた分野について知りたくても、そのような本から読んだらいいか迷うことがあるため、このような場所があることで、自分の中の引き出しを増やしやすくなると思う。漫画から影響を受けたり、興味を持つことは多くあっても、それを深めていくまでにはいたらなかったり、どこから深めていったら良いかわからなかったりするが、漫画の横に知識の延長となる本が置いてあることで、気軽に自分の興味を伸ばすことができる仕組みは素晴らしいと思った。漫画は娯楽的なイメージが強くあり、大学内に漫画があると聞くと休憩するための場所を想像するが、本の並べ方によってこんなに在り方が変わるのか、と驚いた。今後、何かを発表したり、展示したりするときの参考になる。 私が知っている本はほとんど置いてあり、大学の図書館に置いていいんだ、という内容の本まであるため、ビブリオシアターに置く本は、どのように決められているのか気になった。 本当に夢のような場所で、何日でもいられると思ったが、実際に利用している近畿大学の学生はどのように感じているのだろうか。

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）15:30-17:00

ワークショップ「規範的文化要素を脱するために」

1) プログラムの中で気がついたこと

高橋先生の「文化のシステムは、自分の体に異質のものが入り込んでくる時に拒否反応を起こす」という話を聞いて、私自身が異なる文化に出会ったとき、その文化に対して違和感を感じたり、うまく受け入れることができなかったりした自分の今までの反応は、いけないことではなく、複言語・複文化への一つのステップだったのではないか、と考えた。

2) 学びを活かすには

異文化に対して違和感を抱いたときに、なぜ自分はその文化に対して違和感を抱いたのか、自分の中にその文化を取り込むにはどのような形になれば良いのかを考える。 また、異文化に嫌悪を示す他者に対しても、複文化の観点から頭ごなしに否定するのではなく、なぜその人はその文化に対してこのような態度をとるのか、どのようにしたら、相手の中に取り込まれるのかを考えることができる。

3) 感想・疑問など

方言を文字で表すのは難しい、という話があったが、公式文書（朝廷・幕府など）以外の日常的なもの（物語や日記など）を文字で表す、記録に残すようになる前から、各地に方言は存在していたと思うが、なぜその方言独特の音を表す文字が誕生しなかったのだろうか、あったけれども、何かの機会に統一されてしまったのだろうか、と思った。

・日時：2023 年 3 月 26 日（日）10:30-14:30

フィールドワーク_大阪上本町探求調査

1) 事前学習を通しての目標

他の地域に行った時には、そこで有名なものだったり、自分の地域との違いなど特別なことをピックアップして見がちであるため、そこに生活している人の日常生活に注目すること。

2) プログラムの中で気がついたこと

他の地域の方と交流した時に、相手の文化はとても素晴らしいものに見えたが、自分の地域の文化についてはうまく説明できないし、誇っていることもなく、地元にはそのような文化と言えるものはないと思っていた。しかし、それは地域の問題ではなく、自分自身の意識の問題なのではないか、と考えるようになった。意識・視点を変えたら、今まで自分が見えなかった地元の文化が見えてくるかもしれない。自分自身への気づき。 また、「クリアネス委員会」を通じて、自分の疑問をぶつけるような質問は出てきやすいが、相手を引き出ような、相手の引き出しを開けるような質問をするというのは難しいと感じた。

3) 学びを活かすには

ディスカッションなどで相手の話を聞くときに、ただ相槌をうったり、自分が疑問に思ったことを質問したりするのではなく、さらに相手が考えを深めることができる質問は何か、どのように質問したら良いかを考えてみる。

4) 感想・疑問など

なぜ大きな道路は電信柱や消火栓などを地下に埋めているのに、小さな道路は電線が張り巡らされているのか気になった。 「辻」という文字がつく名前の人が多いと感じたが、調べたところ、特に多いというわけではないらしい。「辻」はさまざまな由来があるようで、走路の十字に交差しているところ、中心地を表しているらしいので、それと何か関係があるのだろうか。

・日時　：2023 年 3 月 27 日（月）

学生間交流

1) 27 日に初めて「体験したこと」

大阪城に行くこと。 大阪の地下鉄や阪神線を使うこと。 自分が行きたいところへ、友達を連れて行くこと。（私は、方向音痴な上に行き当たりばったりなところがあり、私が行きたいところへ行こうとすると友達を振り回してしまうため、相手を困らせてしまうこともあるし、それが申し訳なくて自分もゆっくりみることができないので、今までは友達が行きたいところへついて行って行くことがほとんどだった。）

2) 体験を通して「気づいたこと」

大阪城の周辺は、行政機関が多く集まっていた。その一方で、時間帯も関係しているのかもしれないが、周辺を歩いている人は仕事の人よりも観光客が多かった。 地下鉄は、地下鉄の中の広告はあまり地元の地下鉄とあまり変わらなかったが、地下鉄が走る音が違うと感じた。仕組みが異なるのかもしれない。 それぞれの駅の名前を見ていると、「みかげ」や「おかもと」など、苗字になっている名前の駅が多いと思った。 大阪から神戸、など、公共交通機関を使って知らない土地を旅するのは自分には無理だと思っていたが、今回挑戦してみて、思っていたよりもできることがわかった。

3) その他

大阪と神戸は、同じ都市部なので、同じようなイメージを持っていたが、建物も人の雰囲気もかなり違った。大阪は高級そうなビルも古いビルも混在しながらどこも大きなビルがぎゅっと詰まっている感じで、神戸は、意外とビルよりも一軒家の建物の方が多く、所狭しと並んでいた。大阪も神戸も人の多さはそれほど変わらなかったが、なぜか神戸の方が落ち着いているように感じた。住んでいる人たちの気性が異なるからか、そこにあるもの（店の種類や建物など）が異なるからなのではないかと考えた。 神戸の異人館街は、とにかく坂が急だった。また、異人館街にある家は多くが高級住宅だった。お金持ちや海外の人は海沿いの方に住んでいるイメージがあったが、どうしてこんなに坂が急で立てるのも電気や水道を引いてくるのも大変そうな場所に立てたのだろう、と思った。高いところにいる、というのが何かステイタスに関わるのだろうか。

弘前大学×近畿大学 動詞的教養教育 2023
@近畿大学_大阪
2023.3.25-27 参加報告書

弘前大学人文社会科学部　齋藤結友

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）14:00-15:00

アカデミックシアター見学会

感想

それぞれの棚がそれぞれの学問への入り口、または案内所のようだった。Specific な内容というより liberal arts なところがいいと思う。一つの分野を極めてもたこつぼ化してしまっては世界全体の問題を考えることはできず、むしろ様々な分野への横断する知識が物事を多角的に見る視野を与える。アカデミックシアターは学問の入り口としてそういう視点を提供する魅力的な工夫がたくさんあった。「図書館それ自体が本で、棚一つ一つが章」というのがコンセプトであるとは素敵すぎる。あんなに素晴らしい場所が日常にある近大生は本当にうらやましい。　・DONDEN について 漫画が大量に置いてある...なんか図書館のイメージと異なる。漫画は何かをするのに背中を押したり、何かに対する興味を持つきっかけだったりする。私も音楽や絵など、趣味や好きなことは漫画にインスパイアされたケースが多かったと思う。それと同じように、漫画が本や映画と同じように学問への入り口としての役割を担うこともある。DONDEN は、入り口である漫画とそれに関連する本がおかれていることで、そこで興味が生まれてそして育つ場であると思う。主体的な学びは楽しみから始まるよなということを改めて再確認する場所だった。 もし時間があれば BLUE GIANT と、その周辺に置かれてあった JAZZ の歴史やブルーノートに関連する書籍を読んでいた。

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）15:30-17:00

ワークショップ「規範的文化要素を脱するために」

1) プログラムの中で気がついたこと

「学んだこと」... ・規範的文化とは 人間が生まれてから自由を規定し制限するものやルールを「普遍」という。普遍は成長するに従い徐々に大きくなり、最大の「普遍」は国であるとされる。 →「普遍」は自己をカテゴライズするものとも捉えることができる。同じ文化の文脈では「これくらいのことは分かるな」という規範（もしくは「無意識の要素」「共通理解の規範」）は、異なる文化圏で生きてきた人に通じない。例えば日本人が「桃」、「サル」、「鳥」、「イヌ」、「キジ」、という情報から大体の人は「桃太郎」をイメージできるだろうなという期待は、エルサルバドルからきた留学生には通じない可能性が高い。というふうにある集団での「普遍」を他者に押し付けている。他者にとっては恐怖でもそもそも外を知らなければ私たちが同じ「普遍」を共有していることにすら気づくことができない。ジレンマ。 ・複文化複言語主義の難しさ... 様々な言語，文化が共存するフランス社会では、複文化複言語主義が推奨される。しかし文化は常に体系的であり文脈での理解が大切だから自分のものにすることは困難。自己の内部に他者を内包する難しさがある。 ・文化は再構築される ということから 私たちはフィルターを通して異文化を「選択」するというのが面白い。確かに私たちは、「多文化共生」と言いながら理解できるものを選り好みしているのかも。実は「多様性」は都合の良いことばかもという懐疑を連想した。（参考....浅井リョウ著『正欲』） ・複文化は個別の文化が隔離したまま融合する。 →ちょっと違うかもしれないけど....二つの文化

が独立したまま隔離融合するという複文化の在り方に、アラブ首長国連邦の例を想起した。アラブ首長国連邦では労働の場で外国人の投与を積極的に行う一方で、文化が融合しないように外国人と現地のムスリムの居住地とは完全に地区分けされているということを学んだことがある。私はアラブ首長国連邦のある意味多文化の共生の在り方にはすこし冷たさを感じたが、個別の文化が隔離したまま存在するという意味では、複文化なのかなと考えた。彼らの方針を尊重する。個人と国家のレベルでは話がだいぶ違ってくるため、私個人は複文化複言語主義でありたいと思っている。

2) 学びを活かすには

・方言と標準語の上下関係？ 私が小学生のころは方言は年上の人が話す言葉で、自然に標準語優位のように感じていた気がする。方言に少し恥ずかしさを感じていたくらいであったため、弘前に来て若い人たちがどんどん津軽弁をしゃべっていることにはす驚いた。チーム A で一緒だったりょうたさんは関西出身で、彼も彼のオリジンの言葉をよく話していた。その地域で方言がどれだけ生きているか、また他者から受け入れられているかということも若者にその言葉をしゃべらせる要因ではないかと推測する。関西弁は「かっこいい」とか「かわいい」とか特殊な意味を持って受け入れられているが（博多弁や京都の言葉も、みんな真似したいくらい大好きだし）、津軽弁もそうなのかなと思う（関西の言葉に比べ東北訛りは田舎っぽい感じがする「かわいい」）。そう考えると、私の地域の方言は有名じゃないし「瀕死」だなと思う。 ・言葉の構造主義 →Patoi:共通語を前提とする方言コンプレックスについて。標準語が偉くなったのはメディアがその要因の一つであると思う。安藤先生が「テレビっ子」とおっしゃっていたように、一方的なメディアであるテレビが標準語を「規範」たらしめるのに大きな役割を担っていると思う。 ・言い換え不可能な意味を含む方言 文字で表すとき（または訳すとき）、どうしても無理がある方言…。 →言語でも同じ。雪がどのような状態か判断することは生死にかかわることである雪国の暮らしでは、雪の状態を表す言葉がいくつもあるように、言語の中にそれぞれの文化が内包される場合がある。そういう暗黙の規範、「普遍」が方言にも同じように含まれるのだとしたら、方言は単なる言葉の訛りとかイントネーションの地域の差異ではなくその土地に根付いた暮らしを反映させる記号であると考えることができる。

3) 感想・疑問など

上の二つのトピックが行き来して分かりにくい文章で申し訳ありません。明日の振り返りは自分の書きたいことを書きまくるのではなく、明確な文章でかつ時間をかけすぎずに書きます。明日はアースダイバーで読んだことに特に注視して街歩きをすることが目標です。

・日時：2023 年 3 月 26 日（日）10:30-14:30

フィールドワーク_大阪上本町探求調査

1) 事前学習を通しての目標

事前学習を経て読んだエスノグラフィーとアースダイバーについての本から、今日の目標を確立した。ローカルの視点で物をみるということが一つの人類学の目標であるとエスノグラフィーで読み、フィールドワーカーの先生がどこに注目するのかを真似することを一つの目標とした。また私自身の興味がアースダイバーによっていたので、上本町それ自体が生と性、死を内包する町である（例えばラブホテルの近くに墓地があるか）ということを頭に入れて街歩きをすることも目標であった。

2) プログラムの中で気がついたこと

■交通手段/道路について ・自転車かメトロか、高級車という印象を受けた。自転車と歩行者が

共生している。田舎では歩行者が歩いている中を縫うように自転車が通る光景はあまり見られない。今日は雨も降っていたにも関わらず、ハンドルに傘を設置してまでも自転車を使っている光景が少し異様だった。また高級車の割合が高かったことから、田舎に対して上本町では車を所有することは田舎で車を持つよりもステータスが高いのかとも思う。・道路は弘前に比べて状態が良かった。松井先生によると、冬の凍結による道路の破損（気温が上がると膨張してアスファルトにひびが入ることでボロボロになるらしい）が起こらないからだということだった。他にも上本町の信号機は横であるのに対して弘前では縦であるという点にも注目した。これもやはり雪が関係していて、地域によってかけるお金の場所が異なっていることが分かった。・走っているタクシーのほとんどが黒という点も松井先生による指摘で着目した点の一つだった。タクシー＝黒というイメージは、リッチな人が好むハイアー文化が関係しているらしい。確かに高級料亭に横付けされる黒タクシーは簡単に連想できる。・マンホールが城と桜という、弘前と同じイメージで似たようなものを感じる。そもそも「桜」「城」は日本人の美しい日本の「普遍」の一つであるよなと考えた。■人については、歩いているおばあちゃんがシルバーカーを持っている率が高かった ■四天王寺：「日いづる国」の実感 東に位置する本殿、西の海側に開かれたかつて大陸からの訪問者を迎えたという大通りから、聖徳太子の「日いづる国」という言葉に初めて共感することができた。東から太陽がのぼり、西に沈む。かつて大陸からやってきた海の民は、当時の日本にとっては「日沈む国」からの来訪者であったということを、実際に土地を歩くことで確かに実感できた。

事前学習で目標としたことは実践できなかったと思うが、フィールドワークそのものが差異を見つけるための行為だということを今日の街歩きで学んだ。

3) 学びを活かすには

ワークショップの中の、質問することによって自分の関心を明確にしていく作業はこれからの学びや対話にすごく参考にしたい。質問をする方は相手がその問いによって何かを発見できるような良い問いを考えようとするし、逆に質問をされる方もその質問に答えることで自分の関心を強く、または広げることができると思う。相手が成長できるような質問を投げかけたい。そのためにはまず私自身が自分に有益な質問をしたい。

4) 感想・疑問など

近畿大学生徒との交流を通じて、私は何をやっているんだろうとショックだった。英語が話せるだけの人なんてごまんといる。それで私は何を問題だと思い、どんな行動をしたいのかという思慮が圧倒的に足りないということをつきつけられて自分が情けなかった。それでどうするのか。とりあえず考えてきたことをアウトプットする必要があると思う。忙しさをいいことに、一番さぼってはいけないことを避けていたことを反省した。大学の名前にかかわらず、すごい人はどこにでもいる。

・日時：2023 年 3 月 27 日（月）

学生間交流

1) 27 日に初めて「体験したこと」

・道頓堀に初めて訪れた。　・大阪城に初めて訪れた。　・兵庫神戸の街と、異人館周辺を探検した。

2) 体験を通して「気づいたこと」

■道頓堀 中国語が特に多く聞こえた。人のあるく重みで橋が揺れていたのが怖かった。カニは実際に動いていた。以外にも町はきれいだった。

■大阪城 道頓堀と同様観光客がたくさんいたが、城の敷地も弘前と比べ物にならないくらい大きくてとにかくきれいだった。桜も咲いていた。天守閣に登るために長蛇の列ができていて、断念した。それぞれ立っている説明の板は英語 only だったのに対して、アナウンスは英語、中国語、韓国語で放送されていた。大阪城ランナーはおじさんおばさんがおおく、みんなジョグくらいのスピードだった。ランナーのための道が設定されていて、弘前にもあればいいのにと思う。犬も多く歩いていたが、ヨークシャテリアやチワワなど小さい犬種ばかりだった。

■神戸の街 坂がおおい鎌倉のような感じだった。大阪とはまた別のにぎわい方で、整備され、観光しやすい街だった。異人館周辺は本当にずっと坂で、家々に車がおかれていたけど正気かと思った。一般人の住む家は建物探訪に出てきそうな家ばかりで、あそこに住むことじたいが一種のステータスであるのかなと感じた。

3) その他

井関さんはじめ、あすかさん、熊本さん、ゆうとさんなど他の近大生の人と話しながら街歩きをできたことは、学生間交流に躊躇していた夏に比べると成長かなと思う。　「異文化を知って、自文化を発見する」とは今回の交流実験で私自身にもあてはまることだった。近大生と交流することによってインスパイアされ、私も頑張らなければ、と思わせられた。一番私に自己反省を促したのは、近大生の佐々木君との交流だった。佐々木君と私との違いは、どんなことをやってきたのか、どんなことに問題の意識を向けているのか、どんなことをしたいのかということをはっきり言葉にできるか（佐々木君）、できないか（私）というところだった。彼は「水」に興味がある、と話してくれた。水不足の時代にどのように対処するべきかということを高校生の時から考えているそうだった。対して私はどうか、色々なことはやっているけど、そこからどんなこと

をしていきたいのかということを明確にしているか。英語が話せるだけじゃ何も意味がない、そこから私の武器はなんだろうということを、本当に必要なことを、私ははっきり言うことができないのではないか。薄っぺらいことを返してしまったことがすごく恥ずかしかった。そして彼と私のもう一つの違いとして、佐々木君が様々なことに興味関心を持とうとするのに対して、私はほしい結果のために有用そうな目的を選り好みしてきたことがあると思った。私は過去にやってきたことと、自分が理想とする結果を別物として考えていたのではと思う。私は何をしたいのかということを分からないのに、それにつながるような「やってきたこと」を選択（できるはずないのに）しようとしてきた。自分のほしい結果のために目的を選択するのではなくて、いままでやってきた関係ないことにこそむしろ突き詰めれば面白いことがあったかもしれないのに。とても視野が狭かったと思う。佐々木君とのお話は私の物事の考え方がいかに狭かったのかという点で内省する機会になった。また彼が先生と恐れを知らずに交流していることにも驚いた。先生との交流に何も躊躇がなかった。私が学生と夏よりも少し深く交流できたことを一歩踏み出せたと考えるのとはレベルが違うな、と思う。　私が今回のことを通して自分を変えるために余計なことをすべて無駄な事だと思わないこと、を頑張りたい。合理性・有用性にないことや回り道を。視ようとすればすべてに意味がある。フィールドワーク的視点や「雑談」的態度。今の時代に人間としてそのような視点や態度を持ちたいと思う。そのような温かさが、他者との血の通ったコミュニケーションの中で、自分を成長させるのだと思う。そんなことを得に佐々木君との交流で考えた。

弘前大学×近畿大学 動詞的教養教育 2023
@近畿大学_大阪
2023.3.25-27 参加報告書

近畿大学理工学部 井関葵

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）14:00-15:00

アカデミックシアター見学

感想

自分と同じ大学には感じなかった…。毎日通うとおもった。学生が企画して本棚を作っている部分がとても気合が入っていて素晴らしかった。DVD 視聴も「外国語勉強」のためのスペースで、学生たちがいろんなことに触れる機会がたくさんつくられているなと感じた。

・日時：2023 年 3 月 25 日（土）15:30-17:00

ワークショップ「規範的文化要素を脱するために」

1) プログラムの中で気がついたこと

自分の中のラーメンに魚粉だしラーメンは含まれていなかったけど大学に入って、食べてみて自分の中のラーメンに入ってきたなと思った。「名前に縛られている」と聞いて、お好み焼きの話を思い出した。自分たちのイメージは人それぞれ固定されているなと思った。

2) 学びを活かすには

自分の住む地域とたった少し離れただけでここまで違う話が聞けると思っていなかった。 同じ地域にいてもきっと違う話ができるだろう。自分の周りに人がいることはとても幸せなことで、色々話をしたいなと思った。

3) 感想・疑問など

いつかは海外に出てまた自分の中の世界を少しでも広げたいなと思った。

・日時：2023 年 3 月 26 日（日）10:30-14:30

フィールドワーク_大阪上本町探求調査

1) 事前学習を通しての目標

歴史からではなく、今の街から自分の視点で見つけられることをさがそうと思った

2) プログラムの中で気がついたこと

自分の街でも「探そう」と思ってみると、 気付きがありそうだなとおもいました。 フィールドワークの後みんなとの話し合いで、ここまで自分との差や、共通点に気付けると思っていませんでした。

3) 学びを活かすには

対話することはやはり自分の中の考えを掘り起こす上でとても簡単な方法だなと思いました。前知識がそんなになくても、こんなに掘返すことができて面白かったです。 思ったこと、メモしたことから帰ってまたまとめなおしたり、今後も学生と話す時間があるのでどんな話があったのか聞いてみたいなと思います。

4) 感想・疑問など

雨の中でしたがまた晴れの時に友人とやってみたいなと思いました。

・日時：2023 年 3 月 27 日（月）

学生間交流

1) 27 日に初めて「体験したこと」

あべのハルカスにのぼりました。

2) 体験を通して「気づいたこと」

60 階からみると昨日訪れた天王寺はとても小さく見えました。歩いている時真っ直ぐに見えていた道が上から見ると割とグネグネしているように見えました。

3) その他

普段生活していたら会えない人と会えて、いろいろな体験ができて、貴重な時間になりました。短い間でしたが、弘前大の人や、近畿大学の東大阪キャンパスの人と行動ができてとても楽しかったです。